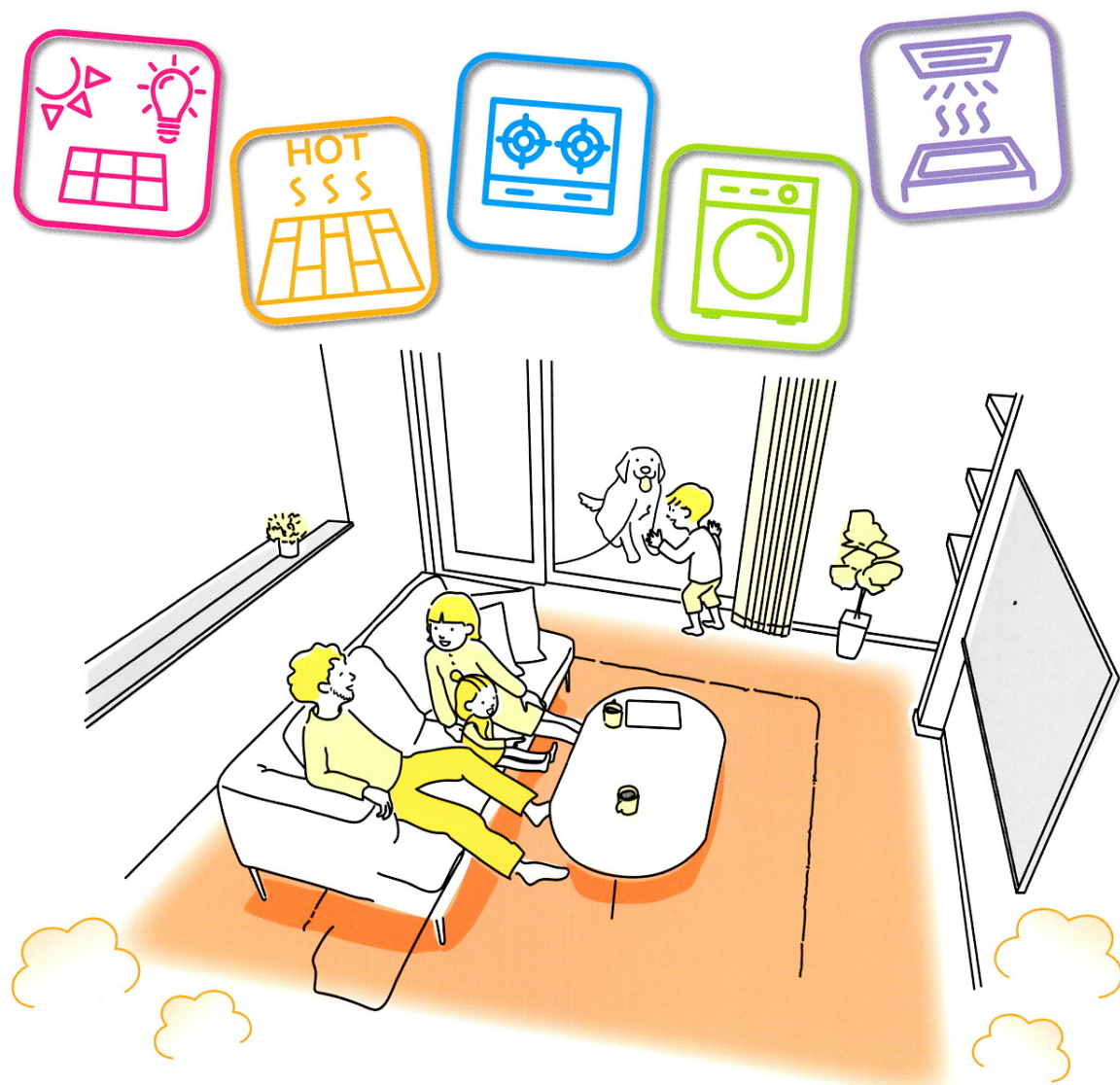


特集

床暖房のある住まい





木を介して「いのち」を見つめ、
たましいを輝かせるものづくり

たご あゆみ
木工アーティスト 多胡 歩未さん



- 1 ひっぱって遊ぶおもちゃ、赤ちゃんのガラガラ、知育ブロックは、いずれもグッドイ賞受賞のロングセラー。小さな手にしっくりとおさまり、舐めても安全な木のおもちゃは、さまざまに子どもの好奇心を刺激します。
- 2 arumitoyの商品は、すべて手づくり。仕上げに至るまで、多胡さん自身がひとつひとつに愛情こめて手がけます。
- 3 4 工房内には、製作中のパーツのほか、あちこちから集まった木がいっぱい。
- 5 アイデアやおもちゃの下絵は、すべてスケッチブックに手描きしています。
- 6 工房に併設されたショップに並ぶ、見るだけで楽しく心があたたくなる木のおもちゃ。これからの季節、クリスマスプレゼントにも大人気です。
- 7 旅立ったいのちの「居場所」として創案された「たましいのおうち」。カウンセリングのようなやりとりを繰り返して、心をこめてつくられます。

多胡 歩未

1978年生まれ、武蔵野美術大学短期大学部卒業後、おもちゃ教材会社勤務を経てドイツのおもちゃ工房で修業。2004年京都府木津川市におもちゃ工房「arumitoy」をオープン。「グッドイ賞」ほか受賞多数。森といのちの循環をテーマに、近年では絵本やアート分野にも活動の幅を広げる。

【問い合わせ先】

arumitoy
京都府木津川市加茂町岡崎中縄手4-2
TEL.0774-34-0625
<https://arumitoy.net>

「自分のつくったもので、子どもたちを喜ばせたい」。木工アーティストとして活躍する多胡歩未さんの原点となったのは、そんな無垢な思いでした。アイデアから完成まで一人で創作できるものと考えた末に、めざしたのが「木のおもちゃ」作家。しかし国内に修業場所がなかったためドイツに渡って工房を探し歩き、出会った作家に直接判して弟子入りしたという強い意志の持ち主です。2年半の修業後、帰国して木のおもちゃ工房「arumitoy」を立ち上げたのが約20年前。当初から、自分が楽しいと思うもの、やりたいと思うことだけを貫いてきたという多胡さんは、「作家として、自分が納得したものしか世に出したくないんです。流行だからとかヒットしそうとかいった邪念が少しでも入ると、自分らしくないものができて

しまう」と語ります。そのやわらかな発想と厳しい創作姿勢から生まれる木のおもちゃには、ほのぼのとしたぬくもりと、ユニークな仕掛けがあります。加えてどこかスタイリッシュで、そのまま飾っても空間になじむ味わいが絶妙。その魅力は、世間ですぐに評判になりました。また、結婚し母親となったことで、発達段階に応じた遊び方など実体験に基づく提案ができるようになったことでさらに評判が広がり、グッドイ賞も次々に受賞。愛される木のおもちゃとしてロングセラーを続けます。

そして、木と向き合ううちに多胡さんの関心は森全体へ。「知るほどに、日本の森が抱えている危機を放置してはいけないうちの思いが強くなっていました」。いわゆる里山は人工林で、人間が伐採して暮らしに役立てることで健全な状態を保ってきたのに、木を使わなくなったために自然界にさまざまな弊害が起きているといいます。そこで多胡さんは、ワークショップなどを通じて木の活用に取り組み、森の現状を直接子どもたちに伝える取り組みを始めた。森を守ることは未来の暮らしを守ること。そのためにも行動すればいいのか、子どもやその親御さんと一緒に考えるきっかけづくりに努めます。「木はいのちを終えると、土になつて次のいのちを育む。その根源的なありようを理解することは、人と人との関係やいのちとの向き合い方を理解することにもつながります」と、多胡さんは森について学ぶ意義を語ります。



そして「いのち」はまた、木のおもちゃのみにとらわれない多胡さんの大きな製作テーマでもあります。実は多胡さんには、生まれたばかりの息子さんを喪い、出口の見えない悲しみを抱えた経験がありました。つらい日々のなかで、息子の居場所として「たましいのおうち」という手元供養の作品をつくったことで、見えなくても居るんだということが腑に落ち、気が楽になりました。それから同じような悲しみを抱えている人の力になりたいという思いで、おもちゃとは別ルートで発注を受け製作しています。私にとつては、この世に生を受け元気に成長する子どもたちのための木のおもちゃも、姿はなくなってしまうけれど確かに今もそこにあるいのちを輝かせる作品も同じくらい大切なものです。多胡さんはあたたかなまなざしで、いのちやたましいを見つめ、形にし続けます。

